

エレクトロニクス産業の先駆者

いぶか まさる

井深 大 (1908－1997)

ソニー



## § 人物データファイル

ソニー株式会社提供

### 出生

明治41年（1908）4月11日に井深<sup>たすく</sup>甫、さわの長男として栃木県上都賀郡日光町字清滝の古河鋳業の社宅で生まれる。父の甫は、新渡戸稲造の門下生で札幌中学から東京高等工業学校（通称・蔵前高等工業、東京工業大学の前身）の電気化学科に進んだ。学生時代に洋書を頼りに独力で小さな水力発電をつくったことを評価され、古河鋳業に採用された。5年後に日光製銅所に技師として配属された。母のさわは北海道苫小牧出身で、当時の女性としては高学歴の日本女子大卒であった。

### 生い立ち

父が出勤途中、凍結した地面で転び腰を強打した後、結核性カリエスにかかってしまい、大が3歳の時に31歳の若さで亡くなった。そのため、母とふたり祖父（甫の父）を頼りに、愛知県碧海郡安城町（現・安城市）に移り住んだ。

祖父母と母との生活は2年ほど続いたが、大が5歳の時、母が母校の日本女子大学附属幼稚園に教師の職を得、安城町を離れた。東京目白に住み、母と一緒に幼稚園、附属小学校へと通った。親子2人の東京暮らしは1年半ほどで、再び安城町へ戻ったが、直後に母方の祖父が病に倒れ、看病のため北海道苫小牧に転居することになった。大が小学校1年の3学期のことであった。数ヶ月を苫小牧で過ごし、大正6年（1917）2年生の時に安城町へ帰る。ところが、帰って間もなく母は再婚、嫁ぎ先は神戸であった。大は一人、祖父母のもとで暮らすことになる。その後、中学受験を控えた小学校5年生の3学期に、田舎で勉強してもなかなか埒があかないと、母

のいる神戸に行くことになった。

大は猛勉強し、見事兵庫県立神戸第一中学校に合格した。中学時代は、義務的な受験勉強をしすぎたせいか、全く勉強に興味を覚えず、無線にのみり込んでいった。5年生からは、無線機いじりをやめ、受験のための勉強を始めたが、希望した浦和高校と北海道大学予科には落ちてしまい、第3希望の早稲田大学第一高等学院理科に入学し、その後早稲田大学に進学した。

### 実業家以前

理工学部3年の時、電気工学の弱電を専攻した大は、光通信の実験を行い成功する。マスコミは「『光電話』の発明」として取り上げ、学生発明家として一躍知られるところとなった。実験では、光を自在に変調するネオン管をつくり「走るネオン」と名付け特許を取得している。就職は、昭和4年（1929）の世界大恐慌の余韻を受け、理工系大卒者の就職は容易でない時代で、東京電気（現在の東芝）に落ちてしまった。また、親戚が紹介するといった函館水電も断わって、昭和8年（1933）PCL（フォト・ケミカル・ラボラトリー写真化学研究所、のちの東宝映画東京撮影所の母体となる）に就職した。学生時代の研究「走るネオン」が認められての採用であった。

映画フィルムの現像や録音を専門とする会社であったが、自由な研究活動も行え、「走るネオン」をパリの博覧会への出展を許され、見事、優秀発明として金賞を受賞した。新聞は「国際的榮譽に輝く、天才的発明家」と井深を称えた。その後、実学志向の強い井深には映画事業が性に合わず、映写機をつくる会社、日本光音工業に移籍している。会社では無線部に所属し、真空管やブラウン管の研究開発を行っていた。やがて、昭和12年（1937）盧溝橋事件に端を発した日中戦争がはじまり、日本光音工業は、測定器をつくる軍事工場へと変容していった。

### 実業家時代

軍の仕事が増えるにつれ、もっと測定器らしいものをつくりたいと早稲田時代の学友、小林恵吾（横河電機で航空計器の研究開発をしていた）を

誘い、社長は日本光音工業の植村泰二社長、専務が小林、常務が井深という「日本測定器」を設立した。機械的振動子を電気回路に組み入れた機器類の研究を行っていた。昭和16年（1941）に太平洋戦争が始まると陸海軍から注文が急増した。昭和19年（1944）戦火が激しくなるにつれ、工場を月島から長野県須坂へと疎開させた。この頃、電波や電子を使った新兵器の研究をする会（科学技術委員会）があり、そこで、海軍から担当将校として派遣された盛田昭夫と出会った。二人には13歳の年の差はあるがお互いを認め合う間柄となっていった。昭和20年（1945）8月終戦、軍事工場だった須坂工場を解散し、残留組と上京組とに分かれた。

井深は、神戸一中の先輩の支援を受け、日本橋の白木屋を事務所に「東京通信研究所」を設立した。最初に手掛けたのは短波受信機であった。新聞で紹介され、その記事を見た盛田から連絡をもらい再会がかなった。次に手掛けたのが、電気炊飯器で、木のお櫃にアルミ電極を貼り合わせただけのものであったため、失敗作第1号となってしまった。事業は徐々に軌道に乗り、昭和21年（1946）5月には「東京通信工業株式会社」に改組した。売れる商品をと電気マット（電気座布団）を販売。仕事が増えるにつれ、白木屋の工場では手狭になり長野県上高井郡小布施村に長野工場を開設し、従業員も増やしていった。しかし、白木屋の売り場拡張のため、立ち退きを迫られ、東京工場は吉祥寺と三鷹台、事務所は銀座へと移転した。NHKから軍用無線機を放送用の無線中継受信機に改造するという大きな仕事が舞い込んだ頃、またまた工場の引越し問題が浮上し、品川の御殿山（平成19年1月までソニー本社地、現在はテクノロジーセンター）に移転した。再び、NHKから音声調整卓の製作依頼があり、全国のNHK放送局の工事を手掛けることでオーディオについての知識を身につけていった。

昭和25年（1950）井深は社長に就任し、盛田が専務となった。この年、国産初のテープレコーダーG型を発売、翌26年（1951）改良普及型H型を発売した。H型では、通産大臣賞を受賞している。携帯用のテープレコーダー「M-I」型・通称デンスケが、普及していった。昭和30年（1955）トランジスタラジオ「TR-55」型を発売。製品すべてに「SONY」の

マークを入れることを決定した。創立10周年の昭和31年（1956）には、世界でいちばん小さいポケットブルラジオ「TR-63」が完成し、昭和32年（1957）に発売開始。本格的な輸出一号機となり、飛ぶように売れた。

昭和33年（1958）商標と社名を一致させることとし、「ソニー株式会社」と変更した。世界初の直視型トランジスタテレビ「TV8-301型」を発表し、翌年から発売を開始した。評判にはなったが、据え置き型のテレビには勝てず、売れ行きはいま一つであった。昭和37年（1962）世界最小・最軽量の5インチマイクロテレビ「TV5-303」を発売し、大好評でよく売れた。その後、技術陣の努力の末、昭和43年（1968）それまでと全く違ったシステムのカラーテレビ「トリニトロン」を発売した。この商品で売り上げを伸ばし、開発料を償却できた。昭和46年（1971）井深は一線を退き社長を盛田に譲り、会長となった。

## 社会・文化貢献

次女が5、6歳の頃、ものすごい消化不良をおこし、下痢が続いた後で知的障害になってしまったことで、井深の社会福祉への関心が高まって、知的障害者を雇用する「希望の家」（栃木県鹿沼市）を設立している。

また、日本を発展させるためには広く科学技術を普及させなければならぬと、昭和34年（1959）理科教育振興資金制度をスタートし、昭和44年（1969）には、幼児開発協会、昭和47年（1972）にソニー教育振興財団を設立し理事長に就任している。

母校の早稲田大学にも、井深大記念ホールを寄進している。

## 晩年

会長職に就任してからは社外活動が中心であった。音楽を聴くのが好きな井深は、アメリカ出張には、教科書サイズの小型ステレオ録音機にヘッドホンをつけたものを持ちこんで聞いていた。しかし、重いため、もっと手軽に、手のひらサイズで再生だけができるものをつくってほしいと大賀<sup>おおが</sup>典雄<sup>のりお</sup>副社長に依頼した。これがウォークマン誕生のきっかけとなった。昭和51年（1976）68歳、名誉会長となった井深ではあるが、発想の柔軟さが生んだヒット製品となった。昭和54年（1979）ウォークマンを発売し、世

界中の若者に受け入れられた。

平成2年（1990）ファウンダー（創業者）名誉会長に就任。平成4年（1992）産業人としては初の文化勲章受章。平成6年（1994）には、ファウンダー・最高相談役に就任している。

平成9年（1997）12月19日、急性心不全のため、89歳で東京都港区三田の自宅で亡くなった。葬儀は東京都品川区のキリスト品川教会でとりおこなわれた。墓所は多磨霊園にあり、「自由闊達 井深大」と刻まれている。

## 関係人物

**井深基** もとい 祖父である基は、元会津藩の藩士で、藩主とともに津軽斗南藩 となみ に移住。その後、明治4年（1871）新政府の廃藩置県の政令発布を機に、家族とともに北海道に行き、北海道開拓使の役人となっている。県令（知事）に重用され、愛知県の県令に転じた時も同行し、県の商工課長、郡長などを歴任した。郡長時代には、新田開発に力を注ぎ駒場用水を完成させている。この用水の恩恵を数百戸の農家が受け、信望が篤かった。

**野村ハナ** 野村胡堂夫人。母の女学校時代の親友。東京目白で母と二人で生活していた頃、近所だったこともあり、両家は親類同様の交際をしていた。井深にとっては、生涯の恩人である。

**野村胡堂** こどう 親類同様の交際をしていたこともあり、井深は慈父のように慕っていた、生涯の恩人である。『銭形平次捕物控』など執筆し人気作家で、大衆向け時代小説家である。井深は就職して3年目には、胡堂からお見合いを勧められ、朝日新聞論説委員の前田多門の次女、勢喜子と昭和11年（1936）に結婚し、同12年には長女、15年には次女、20年には長男と、3人の子の親となる。前田多門没後、昭和40年（1965）に勢喜子と協議離婚をし、親戚で離婚歴のある黒沢淑子と再婚した。

**前田多門** たもん 義理の父。娘の勢喜子との見合いの席で、意気投合し、信頼関係が芽生えた。井深にとってのよき理解者となった。東京通信工業設立時には、名誉職ではあるが社長を務めた。内務官僚から政治家となり文部大臣まで務めた前田は、経営は畑違いであり、素人であるため、親友の元

宮内庁長官の田島道治<sup>みちじ</sup>の紹介を得て、元帝国銀行会長の万代順四郎<sup>まんだい</sup>に相談役を頼んだ。井深が社長となってからは、会長に就任し、草創期のソニーを支えた。また、万代の人脈により、経団連会長を務めた財界人の石坂泰三、首相を務めた石橋湛山<sup>たんざん</sup>らが株主となった。

**盛田昭夫** 井深の終生のパートナー。井深とともにソニーを世界企業に育て上げた。井深の技術的発想を実現させるため、技術者出身でありながら経営に徹していた。資金調達に最大の能力を発揮していた。愛知県名古屋市出身。生家は造り酒屋。大阪帝国大学理学部物理学科卒業。

## エピソード

早稲田時代、アマチュア無線で知り合った島茂雄（のちソニーの専務）に勧められ科学部に入部。部長は山本忠興<sup>ただおき</sup>教授（日本の十大発明家の一人）で、教授の長男とは幼稚園時代の友人だったこともあり、可愛がってもらっていた。またこの頃、親類の人に勧められて富士見町教会（日本キリスト教会）の信者となり、山本教授も同じ協会の信者であったことから、日曜学校の教師を務めるなどクリスチャンとして熱心に奉仕活動を行っていた。

東京通信工業株式会社設立趣意書は、「真面目ナル技術者ノ技能ヲ、最高度ニ發揮セシムベキ自由闊達ニシテ愉快ナル理想工場ノ建設」「日本再建、文化向上ニ対スル技術面、生産面ヨリ活発ナル活動」「国民科学知識ノ實際的啓蒙活動」等、企業精神のあり方の理想の一つとして有名である。

評論家の大宅壯一は『週刊朝日』の昭和33年（1958）8月17日号の連載記事「日本の企業」に東芝を取り上げ、「トランジスタでは、ソニーがトップメーカーであったが、現在ではここでも東芝がトップに立ち、・・・ソニーは東芝のためにモルモットの役割を果たしたことになる」（『GENRYU 源流』p111）と書いた。これに対し、最初は憤慨した井深ではあったが、モルモットを開拓者、先駆者に置き換えて、モルモットによって日本の産業が発展し、ひいては消費者が便利を享受できればそれでよいと語ったという。この時、本田宗一郎は「金をふんだんに持っている大企業が万能であるという考え方は、一世紀前のマルクス主義

と同じ考え方・・・」と自分のことのように怒ってくれたそうである。

モルモット論争後、井深が藍綬褒章らんじゆほうしょうを受章した時、全社員からお祝いの記念にと金張りの「モルモット像」が送られた。井深は、それを大変喜んで、机の上に飾っていたそうである。そして今も、このモルモット像は、ソニースピリットの象徴として、ソニー歴史資料館に展示されている。

## 神奈川との関わり

昭和35年（1960）厚木に工場設立。昭和36年（1961）横浜市保土ヶ谷に中央研究所を創設。昭和49年（1974）に、厚木に湘北短期大学を、学校法人ソニー学園理事の井深大が設立した。

## § 文献案内

### 著作

幼児教育に力を入れていた井深の著作には、母親に向けた著作が多い。著作の中から主なものを挙げた。

『井深大のお母さんへの贈りもの』井深大著 幼児開発協会 1983 〈Y〉

身ごもったお母さんが、よい子を育てるためのよいママであるためには、何を考え、何をすべきか―。をまとめた絵本仕立ての本である。

『胎児から』井深大著 徳間書店 1992 〈Y〉

胎児のうちからの子育てこそが人間の「心」を育てる。母と子の「心のきずな」をつくるのがいかに大切であるかを説いた本である。

『幼稚園では遅すぎる』井深大著 サンマーク出版 2003 〈未所蔵〉

『創造への旅』井深大著 佼成出版社 1985 〈K〉

自らが著した自叙伝。一章から三章は、年を追っての自分史である。四章は、科学する心と教育の原点とあり、教育に関する考えが記述されている。

『わが友本田宗一郎（井深大の本1）』井深大著 小林峻一、井深亮編  
ワック 2004 〈K〉

30数年間におよぶ2人の交友は昭和30年頃に始まった。雑誌で何度か対談をしたもの、また、本田の没後、井深が単行本や雑誌に本田のことを書いたものから主要なものを収録した本である。両天才のチャレンジ精神が垣間見える。

## 社史

『源流』ソニー株式会社編 SONY 1986 〈K〉

ソニー創立40周年記念誌。社内報『タイムズ』に連載されていた“源流”をベースに、ソニーの誕生からトリニトロン開発までのエピソードを綴ったもので、井深の伝記でもある。巻末には、年表、統計、歴代役員、来社したお客さま、ヒットモデルと広告の変遷、国内・海外事業所一覧が記載されている。

『GENRYU 源流』ソニー株式会社編 SONY 1996 〈Y、K〉

ソニー創立50周年記念誌。第一部は、既刊の40周年記念誌『源流』に若干の訂正、修正を加えて、会社創業以前から1960年代までをほぼ時系列で記述したもので、井深の伝記でもある。第二部は、1960年代から1996年までを、14のテーマごとにまとめたもの。

『ソニー自叙伝』ソニー広報部編 ワック 2001 〈K〉

ユニークな商品の誕生秘話とともに、前向きな常に新しく消費者に便利なものという会社精神にあふれたソニーが読み取れる。巻末には、井深の東京通信工業株式会社設立趣意書が掲載されている。

## 伝記文献

『創造の人生 井深大』 中川靖造著 ダイアモンド社 1988 〈K〉

『井深大の世界』井深大語り 小島徹著 毎日新聞社 1993 〈K〉

『世界のソニーを創った井深大・発想の原点』輪辻潔、森野リンゴ共編著 三心堂出版社 1997 〈K〉

本文と参考文献引用の二重構成で、井深とソニーのことをまとめた本である。巻末に、井深大略歴、ソニーの歩み、東京通信工業設立趣意書から会社創立の目的・経営方針が掲載されている。

『本田宗一郎と井深大』板谷敏弘、益田茂編著 朝日新聞社 2002 〈Y、K〉

江戸東京博物館開館10周年記念「本田宗一郎と井深大 — 夢と創造」展の公式本。写真が豊富にあり、戦後日本の時代を生き抜いた二人の姿がよく描かれている。巻末には、二人の年譜、本田の社是、井深の「東京通信工業株式会社（仮称）設立趣意書」がある。

『ソニーを創った男井深大』小林峻一著 ワック 2002 〈Y〉



## ¶ 参考文献

Sony Japan/プレスリリース/訃報

[http://www.sony.co.jp/SonyInfo/News/Press\\_Archive/199801/98-10106/index.html](http://www.sony.co.jp/SonyInfo/News/Press_Archive/199801/98-10106/index.html) (参照2011-11-03)

歴史が眠る多磨霊園

[http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/ibuka\\_m.html](http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/ibuka_m.html)  
(参照2011-11-03)

<佐藤靖子>

### コラム 実業家と美術館（4）

**ポーラ美術館**は、箱根仙石原にある。平成14年（2002）9月にオープンしたが、自然環境破壊が問われて地元の反対運動などがあったため、その美術館構想から完成まで、実に10数年の歳月がかかっている。当初計画していた建物の設計を変更し、「箱根の自然と美術の共生」をコンセプトに、建物を地上2階地下3階の低層設計とし、森に溶け込むような形の設計となっている。

この美術館は、ポーラが平成8年に財団法人ポーラ美術振興財団を設立して創ったものである。コレクションは、ポーラ・オルビスグループの2代目オーナーである鈴木常司（1930-2000）が収集したものであり、総数は9500点あまり。その美術品は国際級と言われており、モネ、ルノワール、ピカソなど、名だたる画家の作品が収集されている。約400点の西洋絵画をはじめとして、日本画、版画、彫刻、東洋陶磁、ガラス工芸などバラエティに富んだ美術品は、行く度が変わる。都会の美術館で人ごみの中、疲れながら美術品を鑑賞するのと異なり、来館している人が決して少ないわけではないのに、ゆったりと美術品を鑑賞することができることから、リピーターも多い。